

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 23号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十五年十一月
第二十二号

< 2013年 11月 >

古賀 順子

パリの夜景

10月最後の日曜日、フランスは冬時間に移行しました。フランスで夏・冬時間制が導入されたのは、1973年のオイル・ショック後、1976年3月からです。3月最終日曜日の午前2時を午前3時に、10月最終日曜日の午前3時を午前2時と決めています。春から夏の太陽光を最大限利用し、エネルギー消費を節約する目的でした。現在では、電気の節約という意識は薄れ、夜遅くまで野外活動ができる期間と捉えている人が多いようです。

冬時間に移行すると、急に日暮れが早くなります。17時を過ぎると暗くなり、朝は9時近くまで夜が明けず、長い冬の夜を告げるのが11月です。その冷たく長い夜を待っていたかのように、パリのイルミネーションが夜空を飾ります。パリの夜景はとても綺麗です。丁度の時間になると、5分間だけエッフェル塔がきらきらと輝き、夜の女王の優雅さと美しさを見せてくれます。バトー・ムッシュに乗って、セーヌ河の水面に映るエッフェル塔の光を眺めると、19世紀末の鉄の文化の素晴らしさに感動します。そのセーヌ河に架かるポン・ヌフの照明も幻想的で美しいです。今秋、パリは長雨続きでセーヌ河の水嵩がかなり上がりました。引き込まれるように轟々と流れる水に反射する橋桁をじっと見つめていると、現実から遠く離れていく気がします。仕事や夜の外出から帰るとき、バスの窓から見るパリの夜景は見飽きることはありません。パリの夜景が美しいのはパリだからとも言えますが、暗い夜にきらめく灯りが人の心を浮かび上がらせるからではないでしょうか。

ライトアップされたルーブル美術館のピラ

ミッドを背景に、寒さに震えながら寄り添い、語り合う若い恋人たちの姿に自分を重ね合わせる人は多いと思います。プランタン、ギャラリー・ラファイエット、ボン・マルシェなど、パリの百貨店のクリスマス商戦を彩るイルミネーションが灯るのも11月です。ショー・ウインドーの玩具に釘付けになっている子供たちの姿は、幼い頃の思い出を喚起してくれます。闇を照らす光は、現在から過去へ、パリから他の場所へと見る人の心に灯っている光と重なります。冷たい風にもかかわらず、温かい人の心を喚起してくれるのが、パリの夜景の魅力だと思います。

そして、パリの夜景といえば、シャンゼリゼ通りのクリスマス・イルミネーションが頂点でしょう。片側200本のポプラ並木に架けられたリング状の飾り照明が点灯されるのは、11月21日18時。年明け1月9日まで、毎日午前2時まで灯されます。青い低消費ランプは、2015年のクリスマスまで再利用される予定です。シャンゼリゼ通りのクリスマス照明が始まると、いよいよ一年の終わりを実感します。

個人的なことですが、私は夜があまり好きではありませんでした。暗闇に引き込まれるような気がして、怖いと思っていました。ところがパリに来て、夜が好きになりました。夜の闇では皆一人だと感じ、秋の夜長、静かに自分自身と向き合うことができるようになりました。くだらないことを考えたり、ボーと外を眺めたりしているだけですが、夜空とほのかな街灯の光に心が休まるように感じます。私のような一人暮らしの外国人にも温かく道を照らしてくれる、パリにはそんな不思議な土地の力があるように思います。